

梵網經の形態

白 土 わ か

大乘經典としての梵網經は、中国、朝鮮、日本等の北方佛教圏内にひろく流布した經典であり、大乘梵網戒のよりどころであった。とくに日本では、中国、朝鮮において、大乘戒、小乘律が兼行されたのと異なり、最澄によって一向大乘戒の戒壇建立がなされ、梵網戒はその基盤として定着した。そしていわゆる円頓戒として展開したのであるが、日本佛教は、戒律の面からの性格を、梵網經に負うところが極めて大きいということが出来る。しかるに梵網經それ自体は、經典としての形態や叙述の仕方に区々たる観をまぬがれぬものあり、ときには晦渋でさえある。また古来より諸字僧による受容のされ方も、その形態面で、それぞれ各自の仕方による、一見雜然たるものがある。梵網經研究の手はじめに、まずそれらの点についての展望を与えることは必要なことと思われる。

梵網經の区分

梵網經は上巻のはじめに經序が二つあり、下巻のはじめに菩薩戒序が一つあるが、まずはじめの經序に^①(抄出)此經本有二百十二卷六十一品、什：唯梵網經最後誦出、時融影三百人等、一時受菩薩十戒、豈唯當時之益、乃有累劫之津、故与道融別書出此心地一品、當時有三百余人、誦此一品、故即書是品八十一部、流通於後代、持誦相授といっている。第二の經序は僧肇作ということになっているが、そこには^②

唯梵網經一百二十卷六十一品、其中菩薩心地品第十、專明菩薩行地、是時、道融、道影三百人等、即受菩薩戒、人各誦此品、以為心首。

とある。もと梵網經は一百十二卷六十一品（僧肇序によれば一百二十卷）の大本であったのを、この心地品一品のみを別に羅什が道融と訳出したというのである。僧肇序には菩薩心地品第十は、専ら菩薩の行地を明かすが、人々はおのおのこの品により菩薩戒をうけ、以て誦し心首となすものであるという。ここにいう心地一品とは、現行の梵網經第十卷菩薩心地戒品上下兩卷をさすものであり、これがいわゆる梵網經と一般に称しているものである。もともと梵網經に一百十二卷六十一品あったとはうなずけないし、この經の各処に種々の品名、たとえば佛性本源品、如來百觀品、一切衆生天華品、法品解觀法門千三昧品、日月道品等をあげて、これらが梵網經大本には存在したことを示唆しているのも架空のことであろう。梵網經が中国撰述の經典であることは、ほぼ定説に近いが、梵網經に、このような大本があったということもまたそれを裏づけることになるようである。古來の註釈は、智顛、法藏をはじめ何れも、大本があったことを記しているが、それは肯定できないことであろう。さきにあげた經序のうち、僧肇作というのもまた仮託である。經序もまた經典作者の作である。梵網經の作者は、大部の經典の一部として菩薩心地と菩薩戒を説示したかったので

ある。あるいは菩薩地をふくむ瑜伽師地論が、または華嚴經や涅槃經のような大部の經典が、作者の意識にあったのであろう。

上下二卷の第十菩薩心地品と題する梵網經は、これが一つの經典として流布した以外に、また別の形で一般に用いられたのであった。まず下巻のみが梵網經菩薩戒序というものを附して用いられたのと、下巻の半ばの偈、「我今盧舍那方坐蓮花台」より以下が梵網菩薩戒本として流布したということである。下巻のはじめの序は、經典作者の作であるかどうか判然としないが、梵網經チベット訳^③（漢訳からの）は、この序からはじまり、經典の一部の如き体裁にして訳しているのである。梵網菩薩戒本として用いられた例では、智顛の梵網戒義疏があるが、それによると

梵網大本一百十二卷六十一品、唯第十菩薩心地品
什師誦、出上下兩卷上序菩薩階位、下明菩薩戒法、
從大本出序及流通皆闕、既別部外稱菩薩戒經

とあり、これは梵網經大本のうち、第十菩薩心地品のみ羅什の訳出するところで、大本の序も流通分もすべてを欠いているけれども、その他に菩薩戒經と称して行なわれたものがあるといっている。これは菩薩戒本のことで

あるが、義疏には、この文につづいて、下巻の途中の我今盧舎那の偈から、釈が始まっているが、そこでは以下の經文を序・正説・勸説流通と分けていて、その部分が菩薩戒經として別出して行なわれたことをはっきり示している。智顛はこの菩薩戒經と称した部分、すなわち菩薩戒本にあたる部分のみを釈しているのである。

また法蔵の梵網經菩薩戒本疏には

唯此梵網經最後什自誦出而共訳之、慧融等從筆受、亦同誦持、仍別録此下卷之中偈頌已後所説戒相、独為一卷、名作梵網經盧舎那佛説菩薩十重四十八輕戒一卷^⑥とあり、また

説心地法門品者是一品者通名也、菩薩戒本品品内別目也

といい、その疏には、この文章につづいて我今盧舎那の偈より釈が始まることからみて、菩薩戒經というのも菩薩十重四十八輕戒一卷というのも、何れも、梵網戒本のことであり、それが別出して用いられたことを示している。

上にのべたように、梵網經はもとも現行の第十卷上下二巻のみのものであったが、しかも、そのうちから別出して梵網戒本として、用いられることが多かったが、

梵網經、もしくは心地戒品等と称せられるときには、上下二巻をさし、梵網菩薩戒經、菩薩戒本等というときには、別出の戒本をさすと理解してよい。

古来よりの註釈は、戒本のみのもので、下巻のはじめからのもの、上下二巻を通じてのもの、まことに区々たるものがある。江戸時代の諦忍は、「古今の諸師此經の註を著すに意業区々なり」と指摘し、平備、円証、凝然らは上巻のみを、法銚、智周、伝奥、智旭らは下巻のみを釈し、太賢、法進、善珠らは全く一品を解すといひ、上下相貫かざれば文意は通暢しないであろうといっている。また智顛や法蔵の疏は、下巻より別出した戒本に対するものである。

諦忍のいうように、上下二巻を通じて註釈をしたのは太賢、善珠らのみであって、上巻はとりあげられることが少なかつたし、現在なお、上巻はあまり読まれず、古来の仕方によるようである。併し梵網經の性格を知るためには、上下二巻を通読することは当然必要なことと思われる。ここでは上巻の概略を展望することとする。

上巻の概略

第四禪地中摩醯首羅天王宮にて釈尊が、無量の諸大梵

天王をはじめとする菩薩衆のために、蓮華台藏世界盧舍那所説の心地法門を説くのが、上巻の結構である。摩醯首羅天王宮が、ここに登場するのは、華嚴經十地品に第十法雲地について^⑤

是名菩薩摩訶薩第十法雲地、菩薩住是地、多作摩醯首羅天王、智慧明達善説、声聞辟支佛菩薩波羅蜜、於法性中有問難者、無能令_レ厭

とあり、菩薩地の最高の場において、釈尊が大梵天をはじめとする菩薩衆のために菩薩の心地について説くという結構がとられているのではないかと思われる。梵網經には華嚴經の投影がきわめて大きく、まず冒頭よりそれがあらわれているものと推定される。大梵天をはじめとする菩薩衆ということについて、華嚴經十地品に第九善慧地について^⑥

菩薩住是地、於三千世界、作大梵天王、善根悉猛利、善以三乘法、示悟諸衆生、

とあって、第九地に大梵天が登場する。いま梵網經に菩薩地をのべるに当って、摩醯首羅天王宮と大梵天王とを登場させて、その場と対告衆を設定したとみられなくない。何故、摩醯首羅天王宮が舞台にえらばれるかは、このように理解してはいかがであろうか。梵網經下巻に出

てくる十処の説法の場合は、最高のところが四禪中摩醯首羅天王宮となるのと、場においては一致している。対告衆となる無量諸大梵天王については下巻に^⑦

時佛觀諸大梵天王網羅幢、因為説、無量世界猶如網孔、一一世界各不同別異無量、佛教門亦復如是、吾今來此世界、八千返、為此娑婆世界、坐金剛花光王座、乃至摩醯首羅天王宮、為是中一切大衆、略開心地法門品竟

とあるが、ここに梵天の網羅というのは、梵網經の經名のおこる所以であろうということは、智顛や法藏の疏に指摘することである。網羅をとりあげたことについては、華嚴經の帝釈天の因陀羅網と対比されていたわけである。經典は菩薩の心地を説き出すにあたって、如佛性本品中広問一切菩薩種子とのべ、佛性本源品という名称がでてくる。これは前述の通り架空のものであるが、ただ佛性本源なる名称に注意をはらっておく必要がある。「佛性が本源」と理解すべきか、「佛性の本源」と理解すべきかむずかしいが、後に出てくる用例、一切佛本源、菩薩本源というような云い方からして、佛性の本源と理解してよいかと思うが、菩薩の心地を佛性の本源とするなら、下巻の^⑧

説_レ我本盧舎那佛心地中初発心中常所_レ誦一戒光明金

剛宝戒、是一切佛本源一切菩薩本源佛性種子

という梵網戒が佛性の種子であり、佛性戒と称することと軌を一にするものとして注目しておく必要がある。

つづいて経文は、蓮華台藏世界の盧舎那が、菩薩心地法門を修行して成佛したことをいい、蓮華台藏世界についての描写があるが、それは華嚴經の蓮華藏世界の類型である。菩薩心地法門は、堅信忍中の十発趣心、堅法忍十長養心、堅修忍十金剛心、堅聖忍十地の四十心である。梵網經の菩薩心地四十心の説述は晦渋の観があり、難渋であり、縷々としてのべられるものである。古来この四十心についての註釈が少ないのも、一方には、これを避けたのではないかと思われるふしがある。太賢はこれをあえてとりあげ釈しているが、善珠は太賢の註釈をうけて、更に明細に読解している。尤も善珠の場合、前三十心のみ_レの註であるが、その読解の仕方には、奈良時代の日本佛教に対して、驚異と畏敬の念を抱かせるものがある。さて、この四十心のうち、前三十心は空思想を基盤とする。空無相によっていろいろどられた菩薩心地は、下巻の菩薩佛性戒といかなる関連があるのか不審の念をおこさせるほどである。そこには同時代に成立したと思われる

る仁王般若波羅蜜護国經との連関を思うべきであろう。

三十心は空無相を基盤とすることは既にのべた通りであるが、つづいて十地は、空思想と同時に華嚴の思想に近いものがある。と同時に華嚴をはみ出ている観も多々みうけられる。たとえば¹⁰⁾

以_レ淨国土_ニ為_レ惡国土、以_レ惡国土_ニ為_レ妙樂土、能_レ轉_レ善作_レ惡_レ作_レ善_レ (第五菩提薩埵慧照体性地)

とあり、まず淨土が現れていることは留意されるが、これらは華嚴經にもあるとしても、善と惡との相即相入をいうのは、いかにも展開した大乘佛教の様相を思わせ、下巻における佛性戒の項とあわせて、梵網戒の一特色を示しているといふべきであろう。また、第九菩提薩埵佛花嚴体性地には¹¹⁾

説_レ無量法門_ニ而能_レ轉_レ魔界_ニ入_レ佛界、佛界_ニ入_レ魔界、
復_レ轉_レ一切見_ニ入_レ佛見、佛見_ニ入_レ一切見、佛性_ニ入_レ衆
生性、衆生性_ニ入_レ佛性

と、佛界と魔界との相即相入あり、佛見と一切見の、また佛性と衆生性の相即相入がある。この一見しぶといまでの思惟方法は、華嚴を超えたものといふべきであろうか。そして佛性と衆生性との相入ということに関しては、のちに出る佛性戒の解説のさいふれたいと思うが、下巻

にでてくる魔受化経ということ、魔が化を受ける、ということとあわせて、梵網戒がこういう思考を背景にもっていることは注目すべきことと思われる。

上巻には以上のように、菩薩心地四十心をあげ、前三十心は空無相の立場を示し、のちの十地は華嚴経の影響の濃いものがある。この四十心が、晦渋な叙述の仕方であらゆるべられている。智顛の義疏には前三十心十地は無相の義に約すといつて、これを特にとりあげようとはしていない。前三十心の空の立場は、仁王般若経との関連を思わせるものがあると、前に一言ふれたが、ここでその問題をあらためて考えてみたい。

仁王般若波羅蜜護国経と梵網経

梵網経上巻の前三十心は、空思想が濃厚であるが、この点を媒介として、同じく中国撰述とされる仁王般若経を連想させ、この二経は同一の背景のもとに出現したものであるのかと考えさせられる。仁王般若経は護国思想の宣揚を、空般若波羅蜜をうらづけにすることによって、立場をもととしたのであり、梵網経は新しい大乘戒の建立と宣揚のために、仁王般若経に範をもとめて空思想をその裏づけとしようとしたのではなかったか。一方は

護国思想の宣揚を、一方は新大乘戒の建立という、五世紀頃の中国の佛教社会が要請したものを、大乘佛教の根本命題である空般若波羅蜜の上に打ちたてていったものが、仁王般若経であり梵網経であったのであろう。

この両経には、いくつかの共通性が見出される。第一の空思想についてはすでに述べた通りであるが、その他の点をあげると梵網経菩薩心地では、四忍（堅信忍、堅法忍、堅修忍、堅聖忍）をあげ、それが四十心に相当するわけであるが、仁王般若経では五忍（伏忍、信忍、順忍、無生忍、寂滅忍）をあげている。五忍の説明は、梵網経の四忍の場合ほど精細でないが、また、両経には用語上の問題にしても、他の経にはほとんど類例のないものが使われているのが注意をひく。たとえば仁王般若経菩薩教化品に^⑩

返照樂虚無^⑪尽原^⑫ 於^⑬第二諦^⑭常寂然
とあり、梵網経上巻には

慧光明焰 為^⑮照樂虚^⑯

というが、樂虚という文字は、きわめて珍しい用例である。これが二経にあり、仁王経では別の箇所でも使用されているのである。また、十六大国、十八梵天という用語がしきりに出るのも両経の特色である。つぎに、蓮華

台藏世界であるが、これは梵網經の一特色として著名なものであるが、仁王般若經にも、また、それに近いものがある。受持品に¹⁶⁾

見釈迦牟尼佛現無量神力、亦見千華台上宝滿佛、
是一切佛化身主、復見千華葉世界上佛、其中諸佛
各各說般若波羅蜜

という。宝滿佛とは盧舍那の異名であろう（不空訳仁王經には遍照如来とある）。そして千華台上にあって、一切化物身の主であり、また千華葉世界上に佛ありということは、蓮華台藏世界の構図である。華嚴經の蓮華藏世界の類型の蓮華台藏世界が、仁王般若經にシンプルな形で見られ、梵網經になると、それが莊嚴されて構成されてゆく。蓮華藏世界から蓮華台藏世界へ発展のあとを仁王般若經を媒介として考えることは無理であろうか。仁王般若經の諸佛は千華葉上で般若波羅蜜を説き、梵網經上巻では諸佛は盧舍那佛によりて菩薩心地法門を、下巻では佛性戒を説く。その説示の内容は異なるけれども、同じ蓮華台藏世界である。また、仁王般若護国經には六重二十八輕戒の名をあげている。

菩薩瓔珞本業經は、仁王般若護国經、梵網經と関連を
持つ經典と思われるが、仁王、梵網兩經のあとをうけて

成立したものであろう。賢聖名字品の十戒は、梵網の十重戒にひとしく、菩薩地の五十二位は、梵網の菩薩地四十位を更に整理し、華嚴經の影響をつよくうけて組織したものであろう。

梵網經下巻の様相

下巻は、その前に梵網經菩薩戒序を附し、ここから古
来しばしば用いられたことを示す。また、下巻の半ばの
偈から梵網菩薩戒本として用いられたことも前述の通り
である。チベット訳はこの戒序からであって、序として
でなく、序を乗と訳し、この箇所をも經文の一部の如く
にとりあつかっている。さて下巻は、盧舍那佛が蓮華台
藏世界において、三世の諸佛がかつて修し、我もまた百
劫に修して盧舍那となった心地法門を、化佛たる千花上
の佛に受持することをすすめ、さらに、千百億釈迦及び
一切衆生のために転じ、次第して受持説誦すべしと説く。
よって千花上佛、千百億釈迦は、蓮華台藏世界より没し、
もとの閻浮提の菩提樹下に至り、金剛千光王座及び妙光
堂にて十世界海を説き、それよりたつて帝釈宮に至つて
十住を説き、次第して、炎天中にて十行を、第四天中
にて十廻向を、化樂天にて十禪定を、他化天にて十地を説

き、三色界の一禪中にて十金剛を、二禪中にて十忍を、三禪中にて十願を、次に四禪中摩醯首羅天王宮に至り、我本源蓮花藏世界盧舍那佛所説心地法門品を説くとある。菩提樹下金光千光王座に始まり、第四禪中摩醯首羅天王宮に至る十処の説法は、華嚴經の七処八会をかりて作られたものの如くである。最高の摩醯首羅天王宮における心地法門の説法は、上巻のはじめと符合しているが、十処を設定せんとしての無理が生じ、不整合を来している。たとえば、他化自在天に説く十地や一禪中の十金剛等は、梵網菩薩心地法門のうちにも入っているからである。智顛の義疏には

釈迦從初蓮華藏世界入天宮、下閻浮提成道場、
釈迦、始於道場説法乃至十処、復從天宮下至菩提樹下……華嚴所説文未盡、止有七処八会、
多道不起本座……而此經多道坐起復至余処……
……又諸地多不相応、前後坐席或復同異、良由聖迹難思、隨機異説耳

という。華嚴は、多く釈迦が座をたたずして他の場所にあつて説法するに對して、梵網經では座をたち、その場に行つて説法するし、諸地も華嚴と相応せぬものがあるが、聖迹は思い難い事であるといっている。經典のうけ

とめ方というものを考えさせられる次第である。さて經によると釈迦は蓮華藏世界より東方に來り、天王宮にて魔受化經を説き、閻浮提迦夷羅國に下生、成道、十処に説法することを再びのべる。魔受化經は架空の經典であるが、これについては前にふれた通りである。さてこうして心地法門品を開示しおわると經にはいつているが、それらの箇所は現行本では下巻に属している。ところが智顛や法藏の疏には上巻であることを記しているのは、何によるのであろうか。疏では梵網という經題の由來をたずねて、經文の梵天の網羅幢のことをとりあげているが、それは經文中のこの場所に記されているので、上巻にいわく梵天の網羅幢云々というのである。このあたりまでを上巻とする別本があつたのであろうか。あるいは心地法門品のつづきであるために上巻と誤認したのであるか、明らかでない。

心地法門については一応おわつて、次に梵網戒の説示に入るのであるが、經では釈迦が天王宮より再び閻浮提菩提樹下に至り、地上の一切衆生凡夫癡闇の人のために戒を説くという設定になっている。それは、盧舍那佛が初発心中より常に誦するところの一戒光明、金剛宝戒であり、佛性の種子であり、佛性戒であるという。まず、

戒の説は閻浮提菩提樹下の地上であり、凡夫癡闇の人のためであることに留意すべきで、上巻の心地法門は、摩醯首羅天王宮において大梵天をはじめとする菩薩衆のために行なわれたものと対比して見る必要がある。善珠の略抄には^⑧

地上簡前天宮、癡闇人簡異地上、以是化身之所化故といっている。菩薩のための心地は天王宮において、凡夫のための戒はこの地上においてと所をえらぶ。菩薩の心地と戒とは整合しないかみえるが、これを結びつけるものは盧舎那佛の心地中、初発心よりつねに誦する戒であるということで、菩薩心地中につねにあるところの戒が凡夫のための戒でもあるという点に於てである。しかし、上巻の空をたてまえとする菩薩心地は、下巻の戒とは直接には結びつかぬのであるか。經典の形体としては、上巻にいう菩薩心地は佛性の本源であるということと、下巻にいう戒は佛性の種子であるということと一致すると理解すべきである。また、上巻の四十心中の第二、戒心の項には^⑨

戒心者非戒無受者、十善戒無師說法、欺盜乃至邪見無集者、慈良清直正実正見捨喜等、是十戒体性、制止八倒一切性離一道清淨

とのべている。戒が空において語られたのであるが、上巻の心地法門は下巻の戒の内実のうらづけとして考えてよいであろう。

下巻に説かれる戒について経には^⑩

是一切佛本源、一切菩薩本源、佛性種子、一切衆生

皆有佛性、一切意識色心是情是心皆入佛性戒中、

当常常有因故……是一切衆生戒本源自性清淨

という。このうち佛性種子ということについて、善珠の略抄によると

由受此戒熏識成種、定当成佛、故名種子、此明習種

とあり、戒が佛性の種子となる。即ち、この戒を受けることにより識に熏じ種を成じ佛性を成熟するということである。つづいて経文の一切衆生皆有佛性以下について同じく略抄に^⑪

以有心故堪受戒、故云皆入佛性戒中、此有二

義、一是前習性名佛性戒、二本有性名佛性戒、

以其佛性本来無非一名清淨戒、多約後義

という。佛性戒に二義ありとし、一は前述の習種性で、この戒を受けることにより佛性を成ずる戒の義であるが、多くは本有性の意に解し、衆生に本来佛性あり、佛性に

よるそのあり方が佛性戒であると解すべきであろう。

智旭の梵網經合註には

佛性種子者此戒本以「正因佛性」為「種子」

と理解し、また

但有心者皆有「佛性」、有佛性者即入「佛性戒中」、以「此妙戒」、全依「佛性理体所」起、還復開「顯佛性」、莊「嚴佛性」故名「佛性戒」也

という。この戒がもともと正因佛性であるゆえに、この戒をうけるものの佛性開發の種子となるというのであり、また、この戒に入ることにより衆生本有の佛性が開顯し莊嚴されてゆくとして理解する。善珠と智旭においては、やはり唯識法相系と天台系の理解の仕方の特徴があらわれているのを見ることが出来る。ちなみにチベット訳には佛法の戒となっているのを見る。

梵網經上卷の十地の中、菩提薩埵佛花嚴体性地には

佛性入「衆生性」 衆生性入「佛性」

というが、本来、佛性と相即の衆生性がこの戒により佛性に入ることができると理解してもよく、それ故に、經にいう如く、一切意識色心は情是心みな佛性戒中に入ることが出来るのであろう。經にさきについて凡夫癡闇人たる衆生が、この心この情をもって佛性戒に入り得るので

あり、魔受化經の名もそのとき肯かれることである。上卷の菩薩心地の十地法門中の「能轉善作惡、轉惡作善」ということも、佛性戒の中で相即しあうのである。一切衆生戒本源清淨と經にいう所以である。それ故に智顛は、この戒を頓教といい、佛性常住一乘妙旨というのであろう。

さてこの梵網經の偈に

千百億積迦 各接微塵衆 俱來至我所 聽我誦佛戒 甘露門則開 是時千百億 還至本道場 各坐菩提樹 誦我本師戒 十重四十八

とあるが、盧舍那佛が誦する戒であり、千百億の積迦もまた盧舍那の戒を菩提樹下に誦すという。次の長行にまた、

爾時積迦牟尼佛、初坐菩提樹下、成無上覺、初結菩薩波羅提木叉

とあるように、成道のはじめに結するということは、戒を一つの教法となし戒に絶対性をもたせていったものと理解される。いわゆる小乗律の隨犯隨制的な仕方ではないのであって、戒の本質と基盤とを求めて、それを佛性においてつきとめ、背景には上卷にいう空無相を、あるいは善惡の判断をこえる思想をあわせ、それらの上に戒

律の理念をうちたて、人間の佛性開顯を目的としたものであった。しかし、戒の本質たる理念は、具体的な戒相によらなければならぬ。十重禁四十八輕戒は、先行の經論（菩薩地持經、優婆塞戒經等）の影響をうけながら組み立てられたものである。戒律の一々は、いまここに記すいとまはないが、戒の条目については整然と經にのべている。はじめに梵網經の区々たる煩雜さと内容の晦澁さとをあげたが、この戒の条目については、それは妥当しないことである。

古註釈の梵網經に対する態度

一応、概略として梵網經の形態と特色とをみてきたが、では何故、古來この經の上下卷を通じて読まれることが少なく、下卷のみか、または下卷の半ばからの戒本のみが用いられたのであったか。

それについて、まず智顛の梵網經に対する態度を考えてみたい。智顛以前、梁の慧皎に梵網疏があったというが伝わらず、慧思には簡単な授菩薩戒儀があるが、智顛の菩薩戒經義疏が出るにしたがつて梵網經の註釈は続々としてあらわれた觀がある。義疏によると大乘戒の經論としては、地持經・瓔珞經・大經・大論・淨名經・優婆

塞戒經の名がみえるが、受戒法においてよるべきものとして六本をあげる。すなわち^④

論法縁道俗共用方法不同略出六種、一梵網本二地持本三高昌本四瓔珞本五新撰本六制旨本、優婆塞戒經偏授在家、普賢觀受戒法身似高位人自誓受法、今不具列、梵網受法是盧舍那佛為妙海王子授戒法、
釈迦從舍那所受誦、次轉与逸多菩薩如是二十余菩薩次第相付、什師傳來出律藏品、先受三帰云
我某甲從今身至佛身……

といい、梵網本、地持本、高昌本、瓔珞本、新撰本、制旨本の六本を推奨している。優婆塞戒經はひとえに在家のためであり、普賢觀受戒法は高位の人の自誓受法に似たりといい、さきの六本を推すが、そのうち梵網戒本受戒法をはじめとして、それぞれの戒本の受戒法を述べている。すなわち当時、受戒のための戒本としてこの六本が重要視され、なかんづく梵網戒本が重んぜられたものと考えることができる。その使用目的は實際の必要性によるものであった。實際的な目的によるものとして、梵網戒本の戒は先行經論を整理して排列した点、好都合であったことと、佛性戒としての理念が確立されてあったことが重要視される所以ではなからうか。義疏には梵網

經上卷に對して^②

說前三十心十地皆約無相義

といつてゐる。それに比し下卷の佛性戒に對しては

是頓教明佛性常住一乘妙旨

といひ、智顛の教判によれば、上卷の菩薩心地は空無相の義におわる故に、頓教である下卷の佛性戒をより重んじていたことになる。また、梵網經上卷には菩薩心地をのべること前述の通りであるが、智顛は菩薩の階位としては瓔珞經の五十二位をとり、梵網經の菩薩地を採用しない。義疏の第一卷にも菩薩地として瓔珞經の五十二位についての説明を与えているさまである。また、智顛は受戒法の戒本としての實際的な必要性からしても、梵網經の上卷をきりすて、下卷のはじめから用いることもせず、別出の梵網菩薩戒本を用いたのであろう。

智顛の義疏があらわれると元暁、法藏とうけつがれてゆき、また下卷のはじめから用いる仕方もあらわれた。そこには菩薩戒序が附してあり、戒律の經典としても用いられたものであろう。勝莊の述記や智周の疏は下卷の疏として最初のものである。新羅の太賢は、あえて上下二卷を讀解した。善珠はそれにつづくわけである。

むすび

上下二卷を通してこそ梵網經は理解されるものと我々は考えるが、上卷は空思想が強い上に晦渋でさえあること、上卷と下卷との関連性は一見あまりみとめられぬこと、もし梵網經に大本があつて、その一部のみが訳出されたものであるならば、上下二卷の関連性はそれほど大事に思われぬこと、下卷において梵網經の戒の条目はまとまって手頃であり、その上、佛性戒としての思想を一応うち出してゐて、菩薩戒本としてこれを別出して用いることが便利であつたこと、まず第一に智顛の義疏において上卷を重視しなかつた、その影響と伝統において、實際的な菩薩戒本が必要であつたこと等の理由で、古來上卷はあまり用いられず讀まれなかつたのではないであらうか。そしてその伝統は現在にもうけつがれてゐるのである。

註

- ① 大正藏經二四卷九九七頁a
- ② 同
- ③ 影印北京版三六卷一六七頁一五
- ④ 大正藏經四〇卷五六九頁。

- ⑤ 大正藏經四〇卷六〇五頁 b
- ⑥ 同 六〇四頁 c
- ⑦ 日本大藏經一九、三頁
- ⑧ 大正藏經九卷五七四頁 c
- ⑨ 大正藏經九卷五七〇頁 c
- ⑩ 大正藏經二四卷一〇〇三頁 c
- ⑪ 同
- ⑫ 大正藏經二四卷一〇〇一頁 b | c
- ⑬ 同 一〇〇二頁 c
- ⑭ 大正藏經八卷八二七頁 c
- ⑮ 大正藏經二四卷九九八頁 b
- ⑯ 大正藏經八卷八三一頁 a

- ⑰ 大正藏經四〇卷五六九頁 b
- ⑱ 日本大藏經一八 四九頁
- ⑲ 大正大藏經二四卷九九八頁 a
- ⑳ 同 一〇〇三頁 c
- ㉑ 日本大藏經一八 五〇頁
- ㉒ 同
- ㉓ 卍統藏一・六〇・四 三三五頁右
- ㉔ 同 三三五頁左
- ㉕ 大正藏經二四卷一〇〇二頁 c
- ㉖ 同 一〇〇四頁 a
- ㉗ 大正藏經四〇卷五六八頁 a
- ㉘ 同 五六九頁 b